

村麻呂の軍の前まで来ると、ぴたりと止まった。

「ありがたい。それ。」

田村麻呂がすばやくその一頭にひらりとまたがると、残る九十九人も続いて飛び乗り、寄せてくる大多鬼丸の手下どもの中にどっとせめいった。

大多鬼丸は、ふってわいたような新しい馬の軍勢にびっくり、たちまち打ちのめされて、とうとうほろぼされてしまった。

その夜、戦勝祝賀の酒もりが開かれていたとき、不思議なことが起こった。いたわって、かいばもじゅうぶんにやっておいた百頭の馬が、いっしゅんのうちに消えてしまったのである。その知らせを聞いた田村麻呂が、ふと思い出したのは、京でもらった木ぼりの馬のことである。急いではこをあけてみるとどうであろう。百頭の木ぼりの馬は、どれもこれもびっしりとあせにまみれていた。

「そうか、この馬がわしを助けてくれたのか。」

田村麻呂は、強く心をうたれた。

田村麻呂は、三春の戦いの記念にこの木ぼりの馬を村に残し、たいせつにあつかうように言いつけて去っていった。

不思議できごとは、まだ終わりにはならなかった。

田村麻呂が去ると同時に、木ぼりの馬の中の一頭が、はこから消えてしまったのである。村の人たちは、

「それは田村麻呂様をお乗せした馬にちがいない。きっとおあとをしたっていったのだろう。」

と、うわさし合った。

あとの九十九頭の木ぼりの馬は、はこに入れられたまま、長い間村に残されていた。

三春駒は、こうした語り伝えから、村の人の手でつくられるようになったといわれています。